



Title	TATの解釈例
Author(s)	氏原, 寛
Citation	大阪外国語大学学報. 1976, 37, p. 119-134
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80598">https://hdl.handle.net/11094/80598</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# T A T の解釈例

氏 原 寛

## An interpretation of a TAT protocol

Hiroshi UJIHARA

This paper intends to report the process of the whole interpretation of a TAT protocol. At the same time, I consider the meaning of tests in counseling. First, I think that the reports are very few on the interpretation of a TAT in Japan. In counseling the necessity of empathic understanding is much emphasized, and, therefore, it is sometimes said that diagnostic understanding is unnecessary or even harmful. Then there is an opinion that if a counselor gives a psychological test having diagnostic intention, he is not what he should be. But I consider that empathy is more subjective experience than is commonly thought to be, and that in order to be empathic with someone one must know him. In this way, to show the procedure of the interpretation of a TAT is to make clear the process of empathy of a counselor - in this case, he is also a tester - with the subject. A tester understands the meanings of the reaction of a subject. He makes a hypothesis on these meanings. Next he thinks of the meanings of the next reaction on this hypothesis. The repetition of this interaction is the process of a test interpretation. Here I see no difference between this procedure and the process of empathy with a client in a counseling situation.

The subject is the same one to whom I gave a Rorschach Test. I made a report about it in this journal last year. It is favorable that you read both reports and understand what kind of aspects of human personality I want to make clear.

### 1. はじめに

昨年度ロールシャッハテストの解釈例を報告した(氏原1975 b).今回は、同じ被験者に実施したTATの解釈結果について述べる。一つには、ロールシャッハテストとTATの場合、同じ投射的技法として現在もっとも広く使われているものであるけれども、その狙いには若干のズレがある。私自身は、ロールシャッハテストは何よりも被験者の知覚のパターンを確かめようとするものであり、たとえば内容分析などによって被験者のイメージの世界を探るのは可能であるけれども、それはむしろこの技法にとって副次的な効用だと考えている。その限りこのテストでは、「何を見たか」よりも「どのように見たか」が優先するのである。一方TATは、大部分何が描かれているかハッキリしている絵に基づいて物語りを作らせるのであるから、そこで何を見、何を連想したかが解釈における主な手がかりとなる。もちろん、シチュエーションは比較的明瞭であ

っても、たとえば登場人物を母と子どもらしく描いても、お互いの表情をあいまいにしておけば、両者の間にどのような感情が交流しているのかわからない。逆に何らかの感情、たとえば攻撃衝動のようなものを、血のついたナイフやピストルなどで表現できるとすれば、人物を描かないことによって、そのような衝動が、どのような状況でかつ何に向けられるか、を不明にしておくことができる。それらを明確にするのは被験者の仕事であって、だからこそわれわれは、作られた物語りから被験者の内的世界について、さまざまな推測をすることができるわけである。以上のことは、T A Tにおける指定度（佐野・楨田1961）の問題であり、それだけロールシャッハテストに比べると、目標を絞りやすくなる。その結果、ロールシャッハテストよりも、比較的意識に近い人格の層を探ることになる、と思っている。そしてそのような差が、実際の解釈にハッキリ現れるものならば、当然、一人の被験者に両方の、場合によってはさらに別なテストを施行する必要が考えられる。いわゆるテストバッテリーの問題として、今までからいくつかの組合せが論ぜられている（たとえば Schafer 1948, Rapaport 1972）。ここでその問題に深入するつもりはないけれども、少なくともロールシャッハテストとT A Tの結果を考え合わせると、どういうことがいえるのかについて、今回と昨年度のレポートが何らかの示唆を与えることができれば、幸いである。

何れにしろ、以上の問題は、やはり具体的な解釈例に基づいて論議せぬ限り、ナンセンスに近い。しかしロールシャッハテストの場合と同じく、T A T解釈についても公表されたもの（戸川ほか1962, 佐治1960, 山本1970など）は、わが国にはそれ程多くない。だから、こうした資料をさらに蓄積する必要がある。また私自身としては、この症例に関して、ロールシャッハテストに基づく推測が、T A Tによってある程度裏づけられた、という印象をもっている。以上が、昨年にひき続いて、今回同じ症例のT A T解釈を報告する理由である。

ところでわれわれの実施したT A Tは、いわゆる阪大法（辻ほか1962）と呼ばれている10枚法である。周知のようにマレー版のT A Tは、教示（Murray 1943）に従えば、各被験者ごとに20枚のカードを使い前後3回にわたって実施しなければならない。特殊な場合を除いて、実際の臨床場面では時間のかかりすぎるうらみがある。だから、できれば1回ですむ簡便法が考えられるようになった（たとえばBellak 1971, Rapaport 1972）。阪大法もその一つであり、主として被験者の対人関係に焦点をあててカードが選ばれている。

## 2, カウンセリングにおけるテストの問題

長い間、来談者中心派の考え方と方法が、わが国のカウンセリングの主流であった。そして、この派の創始者である Rogers は、診断的なテストについては概して否定的な態度をとり続けてきた（Rogers, 1942, 1951）と思う。いきおいわが国のカウンセラーの中には、現在なおテストに対して好意的でない人が少なくないようである。つまり、カウンセリグンとはいわばパーソナルな関係を通してクライアントに好ましい影響を与えようとするものであるから、テストがインパ

一スナルな関係をふまえて、客体としてクライアントを捉えようとする限り、それはカウンセリングのプロセスを妨げる、というわけである。そして、とくに臨床心理学者の間では、いわゆる治療的理解と診断的理解についての論議が一時喧しかった(山本1964, 村瀬1965)。筆者自身、それらについて二・三の発言を試みたこともある(氏原1970, 1971, 1972)。しかし、その問題について最終的な結論が出るのには、まだ程遠い状態である。しかも臨床家としては、賛否何れの立場をとるにしろ、このことについて自分なりの考え方を明確にしておかなければ、毎日の実践にもさし支えるのではないか、と思っている。そこでこの機会に、あらためて私の考え方について述べておきたい。

さて、われわれがあることを知る場合、二つの方法がある。ごく単純化すれば、それらを客観的認識と主観的判断とってよいかもしれない。哲学的な論議はとも角、心理学的立場から考えても、たとえばピアジェ派のいう自己中心性と脱中心化(波多野1972)の概念や、Rogers(1963)の objective knowing と subjective knowing, Jung(1972, 1970b)の objective 又は directed thinking と subjective 又は fantasy thinking など、微妙な差を含みながら、何れもこの二つの知り方についてのべているのだと思う。われわれは、知的な成長に伴って、魔術的な独りよがりの世界から、しだいに、私の認識が同時にあなたの認識でもある客観的な世界に移ってゆく。そして、現代という時代は、このような客観的な認識だけを真実とみなす傾向が強い。しかし意味や価値の問題は、ほとんどの場合、客観的認識と無関係ではないにしろ、本来主観的なものである。だからわれわれは、外国の飢饉で多くの人の死んだ事実の大きさを認識することはあっても、それより遙かに小さな事件である身近な人の死に、一層大きい意味を見出すのである。あるいは、100万円の客観的価値については万人の同意が可能であるけれども、その意味は、金持と貧乏人、若者と老人とでは大巾に異っている。そしてカウンセリングとは、まさにそうした個人的意味について考えてゆくものであるし、たとえば Rogers (1959) が、カウンセラーは、クライアントが「いま、ここ」で感じ経験していることを、あたかも自分がクライアントであるかのごとく感じなければならない、といているのも、クライアント自身の立場から考えない限り、クライアントを理解することができないことをのべたものである。心理治療の各派が、ほとんど一致して強調する共感的理解の重要性も、そこにある。

ところで多くの心理テストは、多かれ少なかれ独自の理論的枠組をもち、それが客観的妥当性をもつかどうかはとも角、被験者をそれぞれの枠組に合わせて客観的に評価しようとするものである。このことは、ロールシャッハテストやTATなどの投射的技法においても例外ではない。その点、被験者について、必ずしも被験者の立場からのみは見ないところがある。そのような態度が共感的理解のプロセスを妨げるとして、カウンセリングにテストをもちこむことに反対する人々のあることはすでに述べた。しかしわれわれが、他人をあたかも彼自身であるかのごとく理解することがはたして可能であろうか。

あるものについてのわれわれの観念は、個々の具体的事物から共通点だけを抽象してでき上

ているという（ハヤカワ1971）。だからたとえば、食べ物についての私の観念は、今までに私が経験した限りの食べ物から抽象されたものである。そして一たんこの観念が成立すると、以後のあらゆる経験は、すべてそれと照合されて、食べ物かそうでないかを見分けられるようになる。もちろん、現実適応やコミュニケーションの必要から、これらの観念はかなりの可塑性をもつと共に、ある程度客観的なものである。しかし、もともなった諸経験はすべて、各人に独自のものであることを見逃すことはできない。たとえばナマコに関する私の観念は、ナマコについての私のあらゆる経験と分ちがたく結びついている。だから、ナマコそのものに限らず、ナマコをめぐるそれぞれの状況で私の経験した喜びや悲しみの一つ一つが、現在の好悪にもつながっているわけである。だから、ナマコを単に棘皮動物として把握する限り、われわれは万人共通の観念を持ちうるけれども、私にとってナマコとは何か、を考えるならば、以上のべた諸経験がすべて関与しているのであるから、その意味を真に理解できる者は私をおいてはない。ナマコの観念一つとり上げてみてもそうだとすれば、人間が他人をあるが儘に理解することなどありえない、ということになる。だから、共感的理解をもしそのように定義するとすれば、どれ程敏感なカウンセラーといえども、クライアントを正しく理解することは不可能である。

しかし、MacLeod (1964) や Allport (1960) によれば、共感とはまず何よりも主観的なプロセスなのである。たとえば棒高跳びをしている選手を見て、いい気持ちだろうなど感ずる時、われわれはまずわれわれ自身の筋肉に、程度の差はあるにしろ、選手が経験しているであろう同じ緊張を経験していなければならない。そのような内的な感覚に基づいて、あの選手も自分の感じているのと同じ爽快な感じを今経験しているにちがいないと思う、それが共感なのである(Jung 1971)。つまり、自分がげんに相手を感じている通りに感ずるのではなく、相手が、今自分の感じている通りに感じているであろう、と感ずるのが共感に他ならない。その意味では、いわゆる投射のメカニズムに極めて近いのである。従って、共感をつねに恣意的な独りよがりにおちこむ危険性をはらんでいる。しかしだからこそ、このようなカウンセラーの共感がクライアントの実感と一致すると、クライアントはまさしく理解されたという実感を持ちうるのである。つまり、自分とは明らかに別個の存在であるカウンセラーが、なおかつクライアントと同じ実感を経験するという事実が、いわゆる出会い、あるいは共存在としての感情を呼び起すのであろう。

そのようなことがなぜ可能になるのか、は別の問題であり、今ここで述べる余裕はない。しかし一点だけ指摘しておく、われわれがある瞬間に感じ経験していることは、われわれ自身が気づいているよりも遙かに広くて深い背景をもっていることである。しばしば、かすかに感じられてはいるのだが、当人にはハッキリ気づかれていないことがある。たとえば一瀬（1968）の報告によれば、ある性的不能者との面接で、結婚を控えたクライアントがしきりに山に登る話をし、それが中腹まで来ると息切れして登れない。何とかして頂上まで行こうとして、ほとんど毎日曜日くり返し山へ行ったということである。山が時に女性の象徴でもありうることは、フロイト（1973 b）の症例以来臨床家には周知のことである。しかしこのクライアントには、何のために

自分が山に登ろうとしているのかは、明瞭に気づかれていない。おそらくそのことを指摘されてさえピンと来ない可能性がある。しかしカウンセラーの側にそのような知識があり、背景にある女性の問題をダブらせながら、山登りの苦しさやついに頂上をきわめた時の喜びなどについて話しあってゆくと、お互いの実感が、話されている内容よりも遙かに深いところで共振れすることができるのである。

おそらくキリスト教や十字架についてほとんど知識をもたぬ小学校2年生の男の子が、母親を思わせる女の人形の首をひきちぎって砂場に埋め、何日か後にそれを掘り出して丁寧に墓を作り、その上で小枝で作った粗末な十字架を立てたことがある(氏原1974)。十字架が、単にキリスト教的な意味を超えて、本来生命の木であり母の木でもあること、したがって当然復活の意味をも担っていること(Jung 1970 b)、又、子どもの成長とはある意味では母をめぐっての死と再生のプロセスであること(エリ・アーデ1971)を思えば、ここで示された子どもの厳粛とさえいえる表情の意味が、カウンセラーには実感として迫ってくる。そしてそのような理解が、子どもとの一体感のごときものをかもし出し、治療のプロセスを一層促がすのである。その他、本人には気づかれない儘に、本人にとって意味のある行動のなされることは、日常場面においても少なくない(フロイト1973, Jung 1970 a)。その意味では、各人各様の多様な行動のパターンにもかかわらず、根源的には、人間の心の動きは驚く程単純なものなのかもしれない。何れにせよ、以上のような理解が、われわれの共感能力を著しく高めるものであることを指摘しておきたい。

ところで、われわれが心理テストによって手に入れようとするのは、そのような理解のために必要な情報である。われわれは、クライアントの状況についてある程度の情報を得ることなしには共感することができない。その場合、客観的な状況と、それを本人がどううけとめているかという主観的状況についての知識は不可欠である。しかし以前にのべたように(氏原1975 a)、それに加えてクライアントの内的状況を知ることが大切だ、と私は考えている。そして、とくに投映法で私の求めるのは、この種類の情報なのである。それによってわれわれは、クライアントすら気づいていない、現在の客観的状況のより深い意味を知りうることもある。それは投映法が、すぐれて検査者の共感能力を必要とする技法だからである。つまり投映法では、被験者の反応に対してまず検査者がその意味を感じとらねばならない。ついでその実感に基づいて次の反応の意味が考えられる。実際の面接の場合は、カウンセラーの独りよがりやクライアント自身によって修正されうるけれども、テスト解釈の場合は、連続した反応の継起が問題となる。だから、検査者があがる反応についてあることを感じたからといっても、その感じが次の反応についても辻褃の合うものでなければ何にもならない。こうしていくつもの反応について、一つの纏ったイメージのごときものが浮かび上がってくれば、個々の反応についての解釈は一見恣意的に見えることがあっても、全体としては妥当なものといえることが多いのである。しかし妥当性の問題は、結局その後の病像が、テストを通してどれだけ正確に予測されえたか、によって決るものである。ただし昨年度の報告と同じく、本論文でも、テスト解釈の結果とカウンセリングの経過とを厳密に照合するこ

とはしていない。それぞれのテストから、テスターがどのようなクライアント像を描きうるのか、を示すのがさし当っての目的だからである。

なお、最後に一つつけ加えておくと、われわれがテストを実施するのは、そうすることがしない場合よりもクライアントの役に立つ、という見通しがあればこそである。その場合もちろん、今後の治療方針を決めるための鑑別診断的な意味もあるけれども、カウンセラーの立場からいえば、それ以外の方法では共感するために必要な材料を手に入れるのが難しい、という場合が多い。実際、寡黙なクライアントの場合、たとえばほとんど話そうとしない登校拒否の中学生的の場合など、ただ一緒にいるだけではどうにもならないことがある。しかし箱庭の作品一つが、家から出るにも出られない少年の気持を伝えており、ひいては面接場面ですら話せないその子どもの内的状況を理解させてくれたりする。被験者になってみれば判ることであるが、どのようなテストであれ、自分には判らぬことを相手には見すかされるというのは、決して愉快的な経験ではない。それだけの犠牲を被験者に強いる以上、それに見合うだけのサービスをテスターは返さなければならぬ。しばしば見られるテスト批判に、テスターが答えられないのは、何のためにテストをするのかについて、十分な吟味が事前になされていなかった場合がほとんどなのではないかと思っている。

以上要するに、カウンセリングに共感的理解は不可欠であるけれども、それはよくいわれるように、おのれを空しくすることによって相手を理解することではなく、すぐれて主観的なプロセスであること。従って、カウンセラーがクライアントに共感するためには、クライアントについてかなりの情報を必要とすること。そして心理テストとは、そのような情報を提供することにおいて、カウンセラーにとってかなり有力な補助手段でありうること、などについて述べた。

### 3, TATプロトコルと解釈

(被験者については、昨年度のロールシャッハテスト解釈例を参照されたい。なお、プロトコルは一括して示すことをせず、各図版毎に反応と解釈をあわせてのべることにした。)

#### 1 カード

(反応) 5<sup>7</sup>少年がバイオリンを前において考えこんでいる状態です。で、場面がそうで、今考えているのは、バイオリン弾くのをおっくうに思っているのだと思う。ま、それで、これ復習やと思うんだが、帰ってきて、えー、——\* 多少疲れたという感じで、今の、さて次にはこれを練習せんといかんのやけど、ちょっと苦痛やなあという状態と思います。それから今後ですか。(はい) ま、あのやると思うけど、ちょっとやるまでに時間がかかると思います。手がけるのにちょっとしんどいなあ、という表情みられますから——。なんか自発的にバイオリンの練習をやったのではなくて、押しつけられてやった感じで、しぶしぶながらやるでしょうけ

---

\* ——は1分経過、——はそれぞれ2分経過、≡≡≡は3分経過を示す。

ど、なんかおっくうでバイオリンを見ている感じ。後では多少練習して、お決りの練習はすると思いますけど＝＝＝。

(解釈) 話の構造はそれ程偏ったものではない。しかし内容は、おしつけられた仕事を苦痛と思いつつもやる、ということで、ロールシャッハテストでみた受け身な態度がここにも現れている。ただし、「お決りの練習の復習」というところには、そうした押しつけに対するこの人の反抗心と、それにもかかわらず結局はやらなければならないことへの、自嘲めいた諦めがある。注目すべきことは、何のためにそうするのか、理由または目的がまったく語られていないことである。いわばこの人なりになっとくした上で、自発的に意欲することがほとんどない。与えられた状況に無気力に応じているだけ、という状態なのである。これらが実際の抑鬱状態に対応しているのは当然であるにしても、なぜそうなったのかについては、この図版に対する反応だけからは何もいえない。ただ、もし、TATの主人公の年齢は被験者が同年令であった頃の心的状況を反映している(Tomkins 1972)とすれば、この人の少年時代、親との関係は必ずしも親和的なものとはいえないことになる。また、バイオリン演奏と男性的役割との間に何らかの関係がある(Bellak, 1971)とすれば、この人に押しつけられた課題は、男性としての自己同一性を確かめることになる。

## 2 カード

(反応) 25" これはなんか外国のいなかの場面で、ま、これ、夫婦にしたらあれですけど、ま、夫婦がおって、これが娘さんで、娘さんはわりに都会的な感じで、——学校に通ってる子が左に佇んでいるという状態ですね。なんでこうなったかというのは、これ、あの、両親はその貧しいながらも、ま、農業で自分の子どもの娘だけには——何とか勉強を身につけさせてやりたいという親心で娘を通わせていると、娘の方も、両親が苦勞して自分を学校に行かせてくれるというのに多少気を遣いながら、両親の方へまなざしを送っている。学校行かしてもらうんは嬉しいけど、済まないという表情がうかがえますけど。＝＝＝なんかこれ、右手のこの母親らしき、母親としたら子どもを妊っている感じですね。それでも畠に出て一生けん命働いている感じですよ。＝＝＝娘の気持として済まないという気持があると思う。両親が一生けん命働いて自分が無理に学校行かしてもらうので、済まないという気持があると思う。ま、将来、これ、学校を出て、これ、あの、ま、女の子ですから教師かなんかになると思うんですけど＝＝＝、が、男の、この女の子が男の子やったら、両親に代ってしっかり面倒みるんでしょうが、女の子だから、収入など学校に行かせてもらった程、両親に恩返しできないんじゃないかと思う。＝＝＝難しいですね、こりゃあ。10"

(解釈) 「なんか外国のいなか」というのは、もうひとつピンとこない感じ、それだけ自分のかわりの薄い、したがって意識から遠い感じを示しているのであろう。内容は、貧しい両親がけん命に働いて娘を学校にやり、娘も感謝している。しかし、卒業後自分の収入で両親に恩返しできないのが心苦しい、ということである。それだけ義務感、好むと好まざるにかかわらず、や

るべきことはしなければならないという、1カードにみられた自発性のなさがくり返されている。妊りながらも畠で働いているということで、母親の存在が強調されていなか。父親についてまったく言及されていないのは、この人の親に対する気持が、母親中心に傾いているからかもしれない。又、まなざしということばには熱がこもっているようであるが、具体的には責任感・義務感以外の感情は表現されておらず、親子間のインチメートな感情交流は認めがたい。この反応の基本テーマは、いわば出立のテーマである。しかしそのためには、家・いなか・大地とのかかわりに基づく十分な成長がなくてはならない。しかしこの物語りには、そのような連続感はなく、娘と両親の世界は切り離されている。このことはおそらく十分の準備性のない出立を意味している。心理学的に言えば、情緒的におとなになりきっていない若者が、知的にはおとなの分別に従わねばならない状態である。学校とは外側の世界であり、今までの情緒的な世界から知的な世界への出立に他ならないのであるが、それは同時に、女性的な母の世界から、男性的な父親の世界への出発でもある。しかし、この物語りにおける準備性のない出立は、「すまない」ということのくり返しに示されるように、恩返しという形でふたたび親の元に戻ることを前提としており、二重の意味で真の出立とはいえぬうらみがある。だから娘にとっては、外側の世界でどれだけ自分の可能性を生かすかよりも、両親のためどれだけ多くの取入を得られるか、の方が問題なのである。「女だから十分にできぬ」というのは、主人公が女性であることを考慮に入れても、なおこの人に、1カードでみた男性的同一感の不足していることを示唆するものかもしれない。なお、「夫婦にしたら」とか「母親にしたら」といういい方は、知的には一応場面の意味を読みとることができののだが、もうひとつ実感としては迫ってこない軽い離人的な傾向、または、この絵に現れたような親子関係にじっくりせぬ感じがひそんでいるからかもしれない。だからこそ、自発的にこうある、ということではなく、こうあるべきだ、ということが前面に出てくるのであろう。かなりの時間（6分10秒）をかけ、終ってから「難しい」といっているのは、内容が相当この人にとって深い所に触れた可能性がある。

### 3 BMカード

(反応) 10" これは何か、15" ま、これ、あのソファの所に女の人が、ま、あの、年が、そうですと25から30ぐらいの人の感じだが、女の人が泣き崩れているという感じですね。この場面は、この左手にある、なんかこれが判りにくいんですけど——、これが、そうですね、空想して作ったら恋愛問題か何かで、そのショックをうけて、ま、あの泣き伏しているという状態ですね。まあ僕の症状と似てて、泣き伏してて、これで立ち直ってくれたらええなと思うんですけど。なんか思いつめた感じで、できたら立ち直ってほしいと思います。＝＝ま、しかし、思いつめて何か早まったことをせんように思う。してほしくないと思う。ちょっと難しく判りません。(それ位?) はい。50"

(解釈) このカードの人物を女と見るのは、時に同性愛傾向の指標になる(Bellak 1971)といわれるが、筆者の経験では、日本人の場合にはそれ程珍しい反応ではない。ところで前のカード

の娘は、この人自身の投映としての意味をもつと同時に、この人の中のあるべき娘像——多くの場合男性は、怪物を倒して美女を救い出す英雄神話が示すように、母親の呪縛を断ち切るために理想的な女性像を必要とする——であるかもしれない。もしそうならば、このカードの女性も、英雄の出現を待ちわびて泣く捉われの少女、ということになる。図版左手のピストル類似のものをそれと認知しえないのは、Bellak (1971) によれば、攻撃衝動の抑圧の結果である。美女を救うためには怪物を倒さねばならず、それには武器が必要である。そして怪物とは多くの場合母親像なのだから (Jung 1970)、母親に戻らねばならぬこの人としては、そうした露わな攻撃衝動を認めえなかったのは当然かもしれない。しかし、一応言及せざるをえなかったのは、男性としての自己同一性を確立するべき時が近づいているからかもしれない。にもかかわらず、肝心の娘は失恋し、思いつめ、早まったことをするかもしれない状態である。ここで、「これは僕の症状に似てて」という self referent がある。一体に self referent は、物語りを客体として語れなくなった時に生ずる。美女を救いえない英雄は、もはや英雄ではない。「早まったことをせんように思う」とは、事態を自らの責任において主体的に解決する用意のない者のことばである。可能性としては、自らの英雄的課題に気づいてはいるけれども、現実的にはまだ時が熟していないのであろう。それがこの人の劣等感の底にあり、そこから若干の自殺念慮があるかもしれない。

#### 4 カード

(反応) 10" そうですね。これ、ま、あの、これ夫婦の一場面、それでまあ主人が非常に怒ってる。それを奥さんがなだめているような状態ですね。ま、それで、これなんか普通の、自分の家じゃないような感じですね。後のポスターみたいな絵も——わりに劇場みたいな、ポスターみたいなん後にはあってあるんで。案外まだ夫婦じゃなくて恋人同士かもわからん。男が怒ってて、女の恋人がなだめてる。なんか気に入らんことがあって帰ってきて、文句、肚の中のをぶっつけて、それでもおさまらんで——も一回行ってくると言ってるのを、女が一生けん命ひき止めてる。で、この、今後、ま、これ、あれでしたら、男が女をふり払って外に出てゆくと言って、けんかいうんですか、相手の所へ撲りこみに行くという感じですね。ま、そんなとこです。10"

(解釈) はじめ夫婦と見ていて、自分の家でもなさそうだから恋人だ、といっている。理由は図版の後にあるポスターである。この女性は、かなりエロチックなポーズをとっており、そうした女性は家庭的ではなく、劇場におけるみせ物ということなのであろう。エロチックな女性のあり方を認めないではないのだが、要するに演技——真実味のないものとして感じている。男は、何か気に入らぬことがあって女のもとに帰ってくる。しかしそれにもかかわらず、またはそのために、彼はなだめる女を振りきって、ふたたび撲りこみに出かけてゆくのである。なぜ不愉快になったのか、また、何のために、さらには結果がどうなるかについては、何も述べられていない。この人の中になんか烈しい衝動的な攻撃性の存在しているのは事実にしても、それはほとんど前後の見境のないものである。又、何かにつけて女性の存在が必要であるにしても、そのことは

事態の解決にまったく役立っていない。母親への固着と理想的な女性像への憧れとが調整されない以上、この人の女性に対する態度はあいまいであり、強迫的に女性を求めても、そこに何を期待するかはこの人自身にもハッキリしていない可能性がある。それは当然この人の男性としての自己同一性を不明確にし、いわば英雄でありえないことが、男同士の世界でもやり場のない不満をひき起すのかもしれない。従ってこの人の攻撃性は、自己主張的というよりは、方向性のない爆発的な衝動にしかすぎない、といえる。

#### 5 カード

(反応) 10" ま、これは、ま、洋画ばかりであれなんだが、ま、あの、これは、あのアパートの一室で、アパートの女主人が、間借りしてる人の所に、なんか呼びにきたという場面ですね。ま、あの、室内は電気もついているし明るい——。誰かこちらの少女ですか。少女いうてもまだ大分上の人がおって、ま、それ、なんか用事があって下宿の女主人が来たということですね。アパートのことで電話がきたら、女主人、管理人の所までくるけど室内までできないので、女主人が上ってきて、電話がかかってきたと呼びに来た場面——。これは単純に中の女の子が、ありがとうといって下に降りてゆくのだと思いますけど、20"

(解釈) この婦人像はしばしば母親として見られるが、この人の場合、アパートの管理人ということになっている。母親イメージに管理的な面が含まれているからであろう。同時に、やや孤独な感じの老婦人を、子どもに捨てられた母親として見るに忍びなかったのかもしれない。一方、こちら側、図版に描かれていない人物として少女が連想されており、男性被験者としては珍しい例である。この少女が、先にのべたこの人の理想的な女性像だとすれば、それが母親像と分ち難く結びつき、かつ外部との連絡はつねに母親を通してなされていることになる。しかし管理人は、電話の内容について知ることはできず、この少女に何程かの自律性のあることは認めねばならない。室内は明るいということから、この女性像そのものは、明るい将来を予想させるものである。しかし、この少女がこれから何をするのか、又、管理人とどうかかわってゆくのか、などについては何ものべられていない。だから、問題をどのように解決するのかは、ほとんどまだ考えられていないことになる。

#### 6 BMカード

(反応) 10" これ、あの、親子で、ま、非常にその、母親に子どもの息子が、その、母親にすまないことをしたという場面が感じられます。ま、それで、ま、久しぶりに、ま、親の顔を——見にきて、ま、好き勝手なことをして遊んだので、母親の所へ謝りに来たら、母親は、今更何をということで、息子の気持を理解できないというか、暖い応待できぬという場面ですね。ま、僕自身、ようこれに、そんな感じがするのだが、僕前に話したように——兄が出た後ずっと両親と僕が住んで、親爺が40年に死んでからお袋と二人の生活で、結婚後2DKで狭く、僕自身一緒に住みたかったのに、兄の所へ行ってもらった。普通は長男がひき取るのだが、一緒に住んだ期間が長く、どうしても僕が面倒みないと、という気持があったものだから——、

ま、久しぶりに会った場面なんだが、その、ま、お袋にしたら、今まで勝手なことして、更何をいいつけて、という感じに見える。僕自身なんかマザーコンプレックスというか、そんなんを持つてる感じありますね。(又、後で話して下さい) はい(今日でなくてね)。は、ま、これも、ま、親ひとり子ひとりというんですか。ま、ま、親の家に息子が訪ねてきて、今までのこと悔いてる感じ。親子のことだから、お袋もこの場面だけでそ知らぬ顔してるが、内心息子が可愛くて、その後機会があれば自分の息子を家に迎えることになると思います。

(解釈) 息子が勝手なことをしたあげく、母の所に戻り謝っているが、母は不機嫌である。しかし結局は許す、というテーマであり、自分にはマザーコンプレックスがある、という self referent がある。母親と同居したかったが結婚で別居を余儀なくされた、という所にこの人の問題がいい尽されているのかもしれない。しかし、息子が謝っても母親が何を今更、というのは、この人の分離の志向がかなり進んでいて、今更母親の望むような共生的な親子関係の復活が考えられないことを、親自身(したがってこの人自身も)気づいているからであろう。そしてそのことは、当然親捨てのコンプレックスとかかわって、ここで self referent が出たのは、ある程度無理のないことである。つまり、結婚—親捨て—罪悪感—抑鬱感といった図式が容易に考えられる。そしてそれらは、客観的にも納得できることであるだけに、意識的レベルで受けとめることが可能である。従って、その背後にある攻撃性や敵意、いわば恐るべき母親としてのイメージは、この人によってまったく意識されません。だからこそこの人は、母親が、この場面ではそ知らぬ顔でも機会があれば息子を迎える、と言えるのである。そしてこの話は、放蕩息子とよき母親の話にすり代えられてしまっている。その限り、この人は自己本来の問題に気づいていないし、洞察のためのプロセスは、かなり苦痛の多い時間のかかるものとなりそうである。2カードと同じく、6分という長い時間のかかっていることにも注意しておきたい。

#### 7BMカード

(反応) 10" これはなんか会議の一場面で、あの、長老のその者が、秘書らしき者に、あるいは部下みたいな者に、相談事で耳うちしている感じ。向いの席にも誰か相手方がおって、会議の席でちょっと——決断しかねることがあるんで、部下に相談、耳うちしてるということです。その返事を聞いて、この長老の人も相手方の方に話が続いてゆくと思いますけど。(それで終り?) はあ。40"

(解釈) 前のカードが、母子関係についてのビビッドなイメージを触発しやすいのに対し、このカードは父子関係を反映することが多い、といわれている(Rapaport 1972, Bellak 1971)。ところがここでの年長の男は、一応フォーマルな場では長老としてまつり上げられてはいるものの、若者に対して何ら指導的ないし保護的な役割をとっていない。むしろ若者に助言を求め、それによってその場を切りぬけようとする弱い存在である。男性が一人前のおとなに成長してゆくためには、頼もしい父親の存在が重要である。この人にはそのようなチャンスが与えられなかったのかもしれない。前のカードにおける母親との関係のよしあしはとも角、この人にとって父

親との関係は、よかれあしかれ母親程の印象を残していない。憶測すれば、ドミナントマザーに対する影の薄い父親であったのかもしれない。もちろんこの父親がすでに死亡していることは考えねばならないにしても、この人が父親との接触を通して、自らの男性性を学習することはなかったものと思われる。それがこの人の、男の世界で十分に自信をもつことができず、いきおい、かなり女性的な性格を形成することになった理由の一つであろう。

#### 10カード

(反応) 10<sup>o</sup> これはあの、恋人同志やと思うが、非常にお互いに愛しあっている。ですけれども、恋人同士ですね、これ。ですけれど、あの、まあ、幸せな状態やなしに、なんかこう、あの悲恋いうんか、そんな感じで、ま、この絵の白黒という感じから受けるのかもしれないが、ハッピーエンドで終るというのでなく、今、久しぶりに東の間の、ちょっとの間めぐり会ってお互いの愛を確かめあってるという感じです。画面からもなんかフランス映画的な感じを受けて、なんかハッピーエンドで終らなくて——、現在は恋人同士だが、なんか皆から祝福されてハッピーエン で終わらない、なんか悲しい結末に終るような関係に感じられますね。40<sup>o</sup>

(解釈) 恋人同士深く愛しあっているが悲恋であり、皆に祝福されない。だからこの場面は東の間の愛の確かめなのだ、という。さらにそれをフランス映画として、空想的・非現実的なレベルでしか受けとめることができない。おそらく本人のいうマザーコンプレックスのために、対等の人間関係としての愛情関係に何らかのブレーキが働いているのである。それだけ母親の呪縛が強く、6BMの結果とあいまって、この人の回復は遅々としたものになるおそれがある。しかし空想的レベルにせよ、恋人関係の志向されていることは、そのことが罪悪感から症状形成につながるマイナス面をもつにしろ、この人の成長にとって不可欠のプロセスともいえる。

#### 13MFカード

(反応) 5<sup>o</sup> これはなんか、男の部屋ですかね。女の部屋ですね。女の部屋、男の部屋かも判らん。男の部屋に恋人が訪ねてきて、そうするとおかしいな。やっぱり女の部屋です。女の部屋に男が、愛人関係と思うが、鍵を持ってることやし、女の寝こんでいるところに入ってきて——、直接手を下したのではないにしても、女の方に事が起って死んでいるのを発見して、泣いているという感じですけど。こんな場面見るのは余り好きやないけど、ま、女の方が死んでいるという感じですね。——男が手を下したんかも判りませんが、手を下した後、自分の恋人を殺してしまったと、ま、途方にくれているという状態です。ま、余り手を下して殺したということを考えたくないですけどね。ちょっとこんな苦痛ですわ。なんか男が殺したいのん見てたら苦痛な感じ。——で、あの、なんか実際の場面じゃなしに、劇中劇としてみたいですわね。本当に劇の中で手を下して——恋人を殺してしまったということで、劇が終れば女の子に起き上ってほしいと思いますわね。ま、そんなんで、これ、嫉妬に狂って殺したんやと思いますけど。こういうことしてしまえば、男の将来はお先まっ暗で、もう生きていても仕方がないという状態になると思いますわね。——

(解釈) はじめ男の部屋か女の部屋かで混乱がある。男女関係におけるイニシアティブの問題かもしれない。ドミナントマザーに馴らされた子どもは、女性に対して主導権をとりにくい所がある。しかし、男が積極的に女を訪ねた時、女はすでに死んでいる。このことは、一つには、女性に対して積極的にふるまうことは、必然的に女の死につながる、ということである。これは、母親への敵意が抑制されることなく行動化された場合、生命の根源でもある母親の破滅を招くという考え方(クライン1975)と関連があるかもしれない。そう考えると次の、男が手を下して、ということの意味が判りやすくなる。女の死が男の行動の結果だからである。もしそうならば、母親に対する秘められたこの人の敵意の存在が、ここでも裏づけられたことになる。しかしこの場合は、怪物としての母親を倒して美女を救出するという意味ではなく、母親の破壊が文字通り存在の基盤を掘り崩すことになり、現実的レベルでは、それが精神病的破綻につながらないとはいえない。その点攻撃衝動の抑圧は、病的な破綻に対する神経症的な防衛といえるかもしれない。次にもう一つの考え方は、親の魔力が、この人の母親以外の女性への接近を禁止しており、あえてそれを犯せば、処罰として相手の女性に死がもたらされる、ということである。怪物を倒すか少女を見殺しにするかは、そのどちらかなのであって、両者を救うことはできない。だから怪物を倒すことができなければ、少女は死ななければならないのである。3BMの少女の歎きは、まさにそうした少女の歎きでもある。この場合も英雄の近づくことがなければ、少女は閉じこめられた儘であっても、死なずにはすんだかもしれない。だから事を起したことは手を下したのと変らないのである。何れにしろ、この人が対女性関係に積極的役割を演ずることは、何らかの意味で犠牲を伴い、この人の英雄的行為が不可欠となる。しかし現段階において、この人に英雄的資質は乏しく、衝動的に事を運んでみても、結局は泣いて途方に暮れることしかできない。従って、「こんなことを思うのは大変な苦痛で」、唯一の方法は、これを劇中劇に仕立てて、本当は女は死んでいないといい聞かせることであった。それにもかかわらず、女の死に対する恐怖は妙に生々しく、「こんなことになってはお先真っ暗で、生きていても仕方がない」程である。要するに現在、この人が進むもならず退くもならずといった状況にあるのは間違いない。だから現在の停滞はかなり続くものと考えなければならない。又、無理に行動化させることは、この人に堪え難くかつ成就不可能の課題を押しつけることになり、場合によっては病的破綻ないし自殺に追いこむ可能性もある。

#### 14カード

(反応) 15" これは青年がビルの窓を開けまして、空を見上げてるという場面ですけど、やはりなんか深い悩みごとがあって、室内を真っ暗にして考え事をして、が、息苦しくなったんで、窓を開けて外を見上げてる状態ですね。なんでこうなったかというのは、えー、もしなんか悩み事があったんやと思います。で、独りとじこもって部屋の中にいた所が、いたたまらず、窓によって窓を開けて外を見てるというあれですね。又それで、外を見上げてても悩み事の解決にならず、又窓を閉めて部屋に閉じこもるといった感じします。——なんか僕の感じによく

似てるんだが、どうしても、下に降りていって屋外に飛び出していったらよいのだが、なかなかそれができないという感じしますね。≡≡≡いつも出てゆきたい気持は非常にあると思うんですわ。凄く画面も黒でしてあるし、男ひとりだけということで、非常に孤独感感じていると思います。≡≡≡ま、しかし、表情から、一応部屋に閉じこもるかもしれんが、上を向いた男の表情もキッとした感じしますので、ま、きっと強い人間になってゆくと思いますけど≡≡≡、ま、それだけです。10”

(解釈) 黒い感じが強調され、どうにもならぬ抑鬱的ムードがうかがわれる。暗い部屋に閉じこもり、問題を明るみに出すことなく、したがって直面することもなく、深い悩みに捉えられ、時にいたたまれなくなって窓を開けるがどうにもならない状態である。これは、多くの神話に現れる、大魚・鯨または怪物の腹中に捉えられた状況を思わせる。英雄はやがて脱出に成功し、それと共に新しく甦るのであるが、この人の場合、望みなしとはいえぬにしても(キッとした表情)、なおその時が熟すまで程遠いものがある。

## 所見

この人の問題は、まず何よりも母親への強い固着である。しかしそれは必ずしも愛着心に基づいているとはいえない(1カード)。TATだけでは明らかにしえない何らかの理由で、この人は母親から離れることができないのである。そこでこの人は自分なりの可能性を試みることもできず(2カード)、ある程度好き勝手にふるまっても、結局母の許に戻らねばならず(6BM)、敢て行動化すればパニッキイな不安をひき起しかねない(13MF)。もちろん、この人なりの自立の道は歩み出されているのであるが、それは単に知的なレベルに止まっており、かえってそのことが葛藤の原因にもなりかねない状態である。性格的にはかなり女性的な面があり(3BM, 5)、これは一つには父親を通しての男性としての同一化が十分なされなかった(7BM)ためと思われる。時に攻撃性の現れることもあるけれども、それらはしばしば衝動的で方向性のない感情的爆発に終る(4)。しかし空想的レベルにおいては、自分なりの可能性を生かすために母親との関係を克服する必要性を感じており(3, 10)、それは、意識的レベルからは遠いけれども、母親への敵意につながっている(13MF)。おそらくそのことに直面してゆく以外に問題の解決はないけれども、現在この敵意を露わにしてゆくことには強い抵抗とそれに見合うだけの危険性がある。だからさし当っての問題は、母の意に逆らうことへの罪悪感、それに基づく抑鬱感として、この人には捉えられている。その点現在の症状は、より深刻な問題を神経症レベルの防衛で防いでいる可能性がある。それだけにこの人は、現在身動きならない状況にあり(14)、症状の早急な改善を望むのは困難である。心理治療の方針としては、できるだけ支持的な態度を保って、この人の空想の世界に徐々にいかかわってゆくのが望ましく思われる。短期間に効果をあげようとするのはかえって危険であろう。

#### 4 要約

昨年度報告したロールシャッハテストの解釈例の、同じ被験者のT A Tの解釈結果を報告した。あわせて、カウンセリングにおけるテストの効用について、若干の考察を試みた。わが国におけるこの種の資料の不足を補うと共に、一部のカウンセラーのテストに対する不信感に対して、実際の資料に基づいて反駁するためである。

#### 参考文献

- Allport, G. W. 1960 Personality A psychological interpretation Holt Bellak, L. 1971 The thematic apperception test and the children's apperception test in clinical use Grune & Stratton
- エリアーデ, M. (堀一郎訳) 1971 生と再生 東大出版会
- フロイト, S. (浜川祥枝訳) 1973a 生活心理の錯誤 日本教文社
- フロイト, S. (小此木啓吾訳) 1973b 症例の研究 日本教文社
- 波多野完治 1972 ピアジェの認識心理学 国土社
- ハヤカワ, S.I. (大久保忠利訳) 1971 思考と行動における言語 岩波書店
- 一瀬正央 1968 学校カウンセリングの研究(第2年次) 大阪市教育研究所紀要101~1
- Jung, C.G. (trans. by Hull, R.) 1972 On psychological understanding in The psychogenesis of mental disease 179-193 Princeton Univ. Press
- Jung, C.G. (trans. by Hull, R.) 1970 A contribution of the psychology of the rumour in Freud and psychoanalysis 35-47 Princeton Univ. Press
- Jung, C.G. (trans. by Hull, R.) 1970b Symbols of transformation Princeton Univ. Press
- Jung, C. G. (Trans. by Hull, R.) 1971 The type problem in aesthetics in Psychological types 289~299 Princeton Univ. Press
- クライン, M. (松本善男訳) 1975 羨望と感謝 みすず書房
- Macleod, R.B. 1964 Phenomenology: A Challenge to experimental psychology in Wann, T.W. (ed.) Behaviorism and phenomenology 47-78 The Univ. of Chicago Press
- 村瀬孝雄 1965 カウンセリングにおける診断の問題 一投影法の新しい意義をめぐる一 誠信書房編 カウンセリングの展望 20~51 誠信書房
- Murray, H.A. 1943 Thematic apperception test manual Harvard Univ. Press
- Rapaport, D. 1972 The thematic apperception test in Rapaport et al Diagnostic psychological testing 464-521 Grune & Stratton
- Roger, C.R. 1942 Counseling and psychotherapy Houghton-Mifflin
- Rogers, C.R. 1951 Client-centered therapy Houghton-Mifflin
- Rogers, C.R. 1959 A theory of therapy, personality and interpersonal relationship as developed in the client-centered framework in Koch (ed.) Psychology: A study of science vol. LLL III 184-256 McGraw-Hill
- Rogers, C.R. 1964. Toward a science of the person in Wann (ed.) Behaviorism and Phenomenology 109-140 The Univ. of Chicago Press

- 佐治守夫ほか 1960 T A T プロトコルおよびそのめくら分析 児玉 (編) ロールシャッハテストの実際適用例 219~235 誠信書房
- 佐野勝・榎田仁 1961 精検式主題構成検査 解説 金子書房
- Schafer, R. 1948 The clinical application of psychological test International Univ. Press
- Tomkins, S.S. 1972 Thematic apperception test Grune & Stratton
- 辻悟・藤戸せつ 1962 事例の分析と解釈 ( I ) 戸川ほか (編) T A T 180~201 中山書店
- 氏原寛 1970 カウンセリングにおけるテストの意義 日本教育心理学会12回総会発表論文集 404~405
- 氏原寛 1971 いわゆる診断的理解と治療的理解について 日本理学会35回大会発表論文集 261~262
- 氏原寛 1972 共感的理解とカウンセラーの枠組 日本心理学会第36回大会発表論文集 500~501
- 氏原寛 1974 臨床心理学入門 創元社
- 氏原寛 1975a カウンセリングの実際 創元社
- 氏原寛 1975b ある抑鬱症患者のロールシャッハテスト解釈 大阪外国語大学学報第34号 1~15
- 山本和郎 1964 診断的理解と治療的理解の本質的相異と両者の関係について — T A T の “ かかわり ” 分析への出発点— 心理学評論 8 188~205
- 山本和郎 1970 T A T かかわり分析法 異常心理学講座 2 95~205 みすず書房